

交通アクセス



- JR 京都駅から
 - 地下鉄烏丸線「北山駅」下車、正門まで南へ約 600m
 - 地下鉄烏丸線「北大路駅」下車、南門まで東へ約 800m
 - 市バス 4 番(上賀茂神社行)「北園町」下車、正門まで西へ約 300m
 - 市バス 205 番(四条河原町経由北大路バスターミナル行)、
206 番(東山通経由北大路バスターミナル行)
「府立大学前」下車、正門まで北へ約 350m

- 京阪出町柳駅前から
 - 市バス 1 番(西賀茂車庫行)「府立大学前」下車、正門まで北へ約 350m
 - 市バス 4 番(上賀茂神社行)「北園町」下車、正門まで西へ約 300m
 - 京都バス 32 番(広河原行)、34 番(静原城山行)、35 番(市原行)
「府立大学前」下車、正門まで北へ約 350m
 - ※ 37 番(雲ヶ畑岩屋橋行)は、平成 24 年 3 月 31 日で運行終了。

- 四条河原町から
 - 市バス 4 番(上賀茂神社行)「北園町」下車、正門まで西へ約 300m
 - 市バス 205 番(北大路バスターミナル行)「府立大学前」下車、
正門まで北へ約 350m

※下記のホームページでも御覧いただけます。

「京都府立大学への交通手段」

(https://www.kpu.ac.jp/contents_detail.php?co=cat&frmId=28&frmCd=8-3-1-0-0)

※本案内は仏教文学会ホームページ

(<http://bukkyoubun.jp/>)にも掲載しております。

二〇一九年度 仏教文学会四月例会

《シンポジウム》「蔵書解析としての聖教調査―覚城院と新安流を例として―」

寺院所蔵文献の悉皆的調査によって得られる大量の書誌情報は、それらを分析する事で多くの新知見を生み出す。本シンポジウムでは、香川県三豊市に所在する覚城院での調査から、近隣寺社との関係や、浄厳和尚を祖とする真言宗の一流派、新安流の展開に関する内容を取り上げる。

これによって、個の新出資料や伝本の紹介が中心の研究から、蔵書全体の傾向分析を基本とした寺院蔵書調査の在り様を提言していきたい。(中山一麿)

*

*

*

道隆寺僧宝厳関連聖教にみる新安流の讃岐伝播の一端

桃山学院大学共通教育機構契約教員 向村九音

宝厳(一六六五〜一七三二)は讃岐に生まれ、道隆寺宥運の資となり、自身も道隆寺明王院に住した。元禄七年(一六九四)〜同十二年、宝永六年(一七〇九)、享保三年(一七一八)などに霊雲寺に随侍し、浄厳自筆本を含めた多くの典籍を書写し、讃岐へもたらした点で注目される僧である。

本発表では宝厳の聖教書写活動と宝厳写本の伝来について整理し、新安流の讃岐伝播の一端を明らかにする。宝厳書写系統の聖教は書写が繰り返されることで、弥谷寺、金刀比羅宮、善通寺、覚城院など、非常に多くの寺院に伝来した。その中で、宝厳生存時の動きを捉えれば、宝厳は金刀比羅宮金光院宥山と交わりがあり、宥山の新安流聖教蒐集に寄与していたことが窺える。また、弥谷寺雲阿や恵光寺慧濬も宝厳写本ないし書写系統の本を多く写しているが、特に後者は金刀比羅宮のお膝元に位置する香積山恵光寺を灌頂道場として復興している。こうした金刀比羅宮をとりまく地における新安流の興隆の中に、宝厳聖教の展開を看取ることができる。

近世期の覚城院蔵書の集積と関連寺院―覚城院蔵『当院灌頂修行之記録』をてがかりに―

四国大学非常勤講師 平川恵実子

讃岐西部に位置する覚城院が所蔵する『当院灌頂修行之記録』(香川県編『香川県史 第十卷 資料編 近世資料II』四国新聞社、一九八七年)は、宝永四年(一七〇七)から明和六年(一七六九)に行われた覚城院における灌頂の記録である。三等・智体・無等・増明という四人の覚城院住職によって行われた灌頂の種類、年月日、灌頂を受けた僧の所属寺院や在家信者の在所、人名などが記されている。これらのほとんどは讃岐の寺院に所属する僧や

讃岐在住の人々である。

一方、覚城院に現存する聖教の奥書からは、讃岐内の諸寺院の他、伊予東部の三角寺、実報寺、徳蔵寺、宝積寺や、阿波の願勝寺、西福寺といった四国の寺院のほか、備中の蓮台寺、摂津の神呪寺、高野山などとのつながりが確認できる。

本発表では、『当院灌頂修行之記録』と、現存する覚城院の聖教に記された寺院や僧名を照らし合わせ、覚城院に所蔵される豊富な典籍が他寺院とのどのような関係性の下で集まってきたのか、その一端を探りたい。

覚城院における新安流の展開―無等止住期を中心に

大阪大谷大学非常勤講師 柏原康人

寺院に伝存する古典籍の多くは、その寺院に関わる僧侶の修学のために蓄積されてきたものである。したがって、それらの古典籍を繙くことで、寺院とその周辺で展開された修学の実態を窺い知ることができると考えられる。発表者は、拙稿「金光寺僧行範の修学―覚城院蔵金光寺旧蔵聖教を中心に」（『覚城院資料の調査と研究（一）』寺院文献資料学の新展開1』（臨川書店、二〇一九年刊行予定）所収）において、覚城院に蔵される金光寺旧蔵聖教（百六十点超）に着目して、覚城院末寺である金光寺の住職であった僧行範の修学について考察した。拙稿では、金光寺という地方寺院の末寺において、行範を中心に新安流を主軸とした修学活動が展開されていたことを明らかにした。

その一方で、行範が活動していた時期の覚城院（Ⅱ三等・智体・無等止住期）における修学や新安流の流入と展開については論の中で少し触れたに止まり、その実態を検討する必要がある。覚城院における修学活動の一端が明らかになることで、本寺（覚城院）における修学活動と末寺（金光寺）の修学活動とを合わせ見ることが可能となり、覚城院とその周辺において展開された修学の様相をより鮮明に浮かび上がらせることができる。そこで本発表においては、無等止住期を中心に覚城院における修学と新安流の展開について考察したい。